



コラム1

用例よもやま話

——『ジーニアス和英辞典』は阪神びいき??

英語辞書編集部

7月中旬、某テレビ局から小社の英語辞書の編集部あてに『『ジーニアス和英辞典』には阪神びいきの例文が多いようですが、どういう事情でしょうか』という問い合わせの電話があった。驚いて、どうしてそんな話が出たのかと聞いたところ、7月初めにタイガースの公式サイトの中にある掲示板に『『ジーニアス和英辞典』の「攻撃」の項に“5回裏のタイガースの攻撃は赤星の二塁打で始まった”という用例があるのを見つけた』という書き込みがあったのがきっかけになって、インターネットで話題になっているという。

あわてて「ジーニアス」&「タイガース」をキーワードにネットを検索してみたところ、なるほど数百件の該当ページがある。その多くは阪神ファンのブログで、「ぶっちぎり」の項にこんな例文があった、「猛攻」の用例がうれしい、といった「発見」の情報が飛び交っている。「昔こういう辞典があれば、俺ももうちょっと英語を勉強したのに」という発言もあった。

ジーニアス英和・和英のCD-ROM版（小社刊）で「全文検索」を行えば、阪神についての用例を検索するのは容易である。担当者があらためて調べたところ、『ジーニアス和英辞典 第2版』には、阪神またはタイガースという語を含む例文が26あり、しかも阪神が勝っている内容のものが多かった。

テレビ局からの問い合わせには、ジーニアス英和・和英の編者・執筆者は大部分が関西の方で、編集主幹の小西友七先生を筆頭にもともと阪神ファンが多い上に、『ジーニアス和英辞典 第2版』の編集作業が山場を迎えたのが2003年の夏で、苦しい作業にあたる先生方が当時の阪神の快進撃に元気を得て、例文にも登場させた、というような「事情」を説明した（この年タイガースは優勝した）。結局、2つのテレビ番組でこの件がとりあげられ、うち1回は小社にテレビカメラ

がやってきて、担当者が出演する羽目になった。

なお、念のため付け加えれば、ジャイアンツが首位を走っている用例もあるし、一方で大リーグ関係の例文も多く、ヤンキースは12回、ドジャーズは8回、イチローは11回、松井は10回登場する。ただし、野球にばかり熱心なわけではない。この辞典の用例は全体では約74,000ある中でこの数字である。

*

もう10年以上前に赤瀬川原平『新解さんの謎』という本が話題になった。これは『新明解国語辞典』の語釈や用例から、その「主人公」の人物像をあれこれ推測したものである。この場合は、個性的な語釈に重点があったし、そもそも和英辞典の場合とは事情が違うが、確かに辞典の用例には編者の個性や嗜好などがおぼろげながら表れるということはある。

しかし、辞典の用例というのは言葉の使い方の例を示すものであり、その内容がすなわち編者の見解であるというわけではないのは当然のことである。

また、用例の内容がすべて事実だと編者が主張しているわけではない。極端に言えば、用例の内容がまったくの嘘でも、その語の用法を正しく伝えていれば用例の使命を果たしているといえる。

とはいっても、実際にはもちろん、なるべく事実と合致した内容になる方向で検討が行われる。以前、『ジーニアス英和辞典』で、ruleの項の用例に「バレーボールではボールを蹴るのは反則だ」という意味の文があったのだが、その後バレーボールの競技規則が変わり、ボールを蹴ってもいいことになって、この用例は事実と合わなくなった。このままでもruleという語の用法を示すのに差し支えはないはずだが、重版のときに「以前は……反則だった」という内容に変更した。

(I)